

う気持ちになったようです。このグループは、模型づくりをやりました。

ほかのグループは、このように、アルバムづくりをしたところもありました。デジカメで、モルモットを撮って、自分も撮って、そして、コメントをつけることをします。これを一人1ページで、10人だと10ページになるわけです。これを合わせてカラーコピーしてあげて、これを各自が持っていることになります。このように子どもたちは思い出を冊子の中に共有して持つことになるわけです。という形で、卒業までモルモットとかわりました。

この作業をしているときに、1匹のモルモットが死にました。突然死んでしまったわけです。このことについても、獣医師の中川先生にご足労いただきて、対処していただいたわけですが、死んだモルモットをみんな嫌がるかなと思ったら、2年間も飼っていると、この写真のようにさわりた



がります。冷たさを感じて、非常に神妙な顔をしていました。おなかも解剖していただきまして、何が原因か調べていただきました。特に病気ではなかったんですが、学校の隅の方に穴を掘って埋めました。ここにお墓をつくりました。このグループは、作品を作っている最中にモルモットが死

んでしまったので、お墓を撮影したりしていました。これもアルバムとして残していくことにしました。

これで映像は終わりです。資料の方を見てください。私が、モルモットを教室で飼うということになったのは、今の保護者が、都会のせいなのかもしれません、簡単な労力で最大限の教育的な効果を得ようとする傾向が非常に強いように思います。ですから、子どもたちも経験が少ない。当然保護者の中にも、まったくほ乳類を抱いたこともないという方もいます。しかし、こういう活動をやりませんかというと、保護者の多くはやりたいと言います。つまりその意味は、教育的な価値は認める。しかし、それを行う際、自分にできるだけ負担のないようにしてほしいという考え方をするわけです。私はそれをなるほどと聞きながら、しめしめと思うわけです。つまり、飼育にかかるわってみれば、そんなこと言っていられないんです。つまり、飼育というのは手間もかかるし、時間もかかります。その体験を子どもたちと一緒にやっているというねらいが私の方にありますので、参加するということはいいんですが、飼育のたいへんさを多くの保護者はわからないでいます。だから、そういう意味でも、このような体験を続けていきたいと考えるわけです。

実際体験してみると、困ることもたくさん出てきます。しかしそれは、1つ1つが教育的にはとても大事な要素であって、誰彼でも成功するような教育ではありません。価値がないんじゃないのかと思います。1つ1つのことにいろいろな問題点がある、その問題点を1つ1つクリアしていくことによって、彼らの中にいろいろな力が付いていくようになるであろうと思うわけです。つまり子どもたち1人1人の問題解決する力を、この飼育という場で彼らに体験させる。その他意見させるエネルギーは、やはり、動物がもつ魅力なんです。これが、ザリガニだったら平気で見殺しにしちゃうんです。だって、抱っこしても冷たいんですから。やはり、ほ乳類の良さというのは抱っこして温かい。可愛らしさがある。自分の思うことが、言葉は通じなくても何か通じたような気がする。こういうことは、子どもたちの日記を見ればすぐにわかります。たとえば、これで土日に各家庭にホームステイに行く。そこで、家族の誰かが、冷蔵庫を開けたとするとその音で必ず鳴きます。つまり冷蔵庫を開ける音で、自分はエサをもらえると思うわけです。そういうことに保護者や子どもたちはビックリするわけです。ザリガニじゃ鳴き

ませんから、このようなことからも、ほ乳類の魅力というのはたくさんあるわけです。

それからもう一つ、みんなで飼っているという責任感があるんです。多くのお母さんは必ず言います。「私のところで死んだらどうしよう」。でも、私が仮に、各家庭にいるときに死なしてしまったらしいへんなことになりますよ。といったら、誰も飼育には参加しません。ですから、いずれ生き物は死ぬですから、死んで当たり前なんですから、別に死ぬことを怖がる必要はない。しかし、死ぬところまで、死ぬ間際まで、最大限の飼育をしていましたか?ということは問われるよ、と言います。つまり、飼いっぱなしで、何も世話しないで、水もあげないで死んだらこれは寿命でしたなんて言えないでしょう?と言います。だから、途中病気で死ぬかもしれない。だけど、子どもも、保護者も、担任も、一生懸命育てていて、それで死んだらしかたがないでしょう?そこまで頑張りましょう。という話をするわけです。そうすると、保護者の方々も少し、肩の荷が下りるわけです。だからといって、手抜きをするわけではなく、一生懸命飼育してくれます。現実に、私は1年生の担任をして、4月からモルモットを飼いましたけれども、2か月で1匹死んでしまったんです。またま家に持ってかえっているときに死ぬんです。今まで、モルモットを死なせたのは、学校ではなく、すべて家に持って帰ったときなんです。みんなそうですから、わたしとしては気が楽なんですが、保護者としては非常に怖いんじゃないでしょうか?でも、逆な言い方をすれば、あなたのところで、このモルモットは死にたかったんじゃないの?という言い方をするんです。なぜかは知りませんが、モルモットが死んでしまった体験をした家庭の子どもたちは熱心なんです。もしかしたら、抱っこしすぎてストレスを与えてしまったのかもしれません。それは、法則とは言えないですが、なんとなくそういう因果というか、そういうものが感じられるわけです。

1年生などは、結構冷酷で、「おまえが殺したんだろう?」などと陰で言うわけです。でもそうじゃないんだよ。と慰めてあげるわけですが、しかし、このことによってできた心の傷は、結構深いものがあります。だから、中川先生にお願いして、またすぐに新しいモルモットを、ただすぐに渡すとまだ恐怖感がありますので、一人介して、すぐにその次の週に、死なせてしまった子どもの家庭に持って行かせて、4日間うまく過ごさせたところ、その子の傷はずいぶん癒えたようです。

そういうところをフォローしながら、いかに継続させるかということが、飼育の難しさかなと思います。生き物を扱っているわけですから、いつまでも生きているわけではありません。そういうところも、教師側で考えなければいけない配慮なんではないかと思います。

このように動物を飼育すると、子どもたちの行動が周りに発展していきます。ひとつは、捨てネコを子どもたちはよく拾ってくるんですが、動物を大切だと思えば、公園で捨てられているネコを拾ってたりするわけです。あるとき、そのネコの周りに野次馬も含めて10人くらいいたんです。それは学校の帰りだったので、近所の獣医師さんにそのネコを見てもらったんです。学校は文京区というところにあるんですが、そこの獣医師さんたちは、学校の動物に関しては、無料で診察してくださることになっているんです。そのことを彼らは知っていましたから、無料で見てもらうことができたんです。目が開いていない子ネコで、かなり衰弱していたそうです。そういうことで、子どもたちはある程度のアドバイスを受けながら見てもらって、安心して持って帰ってきたわけです。そこで、学校の帰りですから、どうするかという話になって、ある1人の子が自分の家に持つて帰ったんです。持つて帰ったはいいんですけど、治療も継続しなければいけないので、親と相談して近所の獣医師さんのところに連れて行ったんです。子ネコは衰弱していますから点滴も受けるし、点眼も受けたりして、1週間毎日通ったんだそうです。そうしたら、治療費が7万円もかかってしまったんです。その7万円をどうするかという話になって、学校でその10人がひそひそ話をしているんです。どうしたんだ?というと、先生は関係ないというんですね。でも、その話の内容は、治療費を払え、払わないということらしいんです。それはなぜかというと、主に拾ってきたのは3人なんです。残りの7人は取り巻きだったんです。だから、主に拾った子が1万円で、取り巻きが千円なんていうようなことを話し合っていて、3人の子たちは1万円ずつ出そうね、なんてことを言っているんです。ほかの子たちは、払うという子もいれば、見ていただけだという子もいます。とうとう、その子たちの親にも伝わってしまって、保護者の中にもどうしたらしいのかと相談してきた方がいて、そこではじめて私は気がついたわけです。そして、7万円については、ある一人の保護者が払ってしまったわけです。その保護者の方は、「もういいです。私が全部払います」と言う

んです。それは決してニコニコして言っているわけではありませんよ。ムッとした顔をしているんです。それじゃ私が...と言っても、私の給料では払えるものではありません。そこで、何かいい方法はないかと思ったときに、学級で相談することにしました。私がクラスで提案したのは、ネコ募金です。そのころは12月だったので、そろそろお年玉の時期だねと言って、千円くらいいいのではないかと促したわけです。40人の子どもたちに、拾っても拾わなくてもみんな払おうよ、と言ったところ、口では言わないまでも、払いたくないという表情をする子どももいるわけです。逆に、積極的に払うという子もいるんですね。そうしたら、12月のある日にある子どもが年賀状配っているんです。よく聞いたら、切手を貼らなければいけない年賀状だったんです。その切手代をお母さんからもらって、自分は切手を使わずに配ったんです。それで4千円くらい募金した子もいたんです。それからある子どもは、モデルのようなアルバイトをしたらしく、もらった図書券を全部つぎ込んだんです。そんなことで、合計4万5千円くらい集まったんです。それを、治療代を払った保護者に渡して、残り2万5千円くらいあるんですが、それは、その保護者がいいですと言って、自腹を切ってくれました。私も少しだけ、1万円くらい出したわけです。

そういうことが起きて、一方では、ネコなんか拾ってくるなと思う気持ちもあるんですが、あの子どもたちの行為を考えると、私がモルモットを教室に導入して、それで触発された子どもたちの気持ちを、お金がかかるからと言ってむげにつぶしてしまうのもいけないことだと思いますし、そういういい行為がいい方向に向かっていってくれるといいなと思います。だから、今度拾ったときには、必ずお金かかりますか?と聞けと言いました。子どもたちは学校のある文京区と自分が住んでいるところも同じだと思っているわけです。しかし、東京都には残念ながら文京区と同じように、治療費を持ってくれない区もあるんです。だから、学校で飼っている動物だということをちゃんと言わないとだめだと、子どもたちには言いました。この辺、獣医師さんは是非ご理解いただきたいと思います。子どもたちはよかれと思ってやっていることなので、治療費が必要であれば、治療費かかるけどどうしますか?と言っていただければいいんです。ところが、保護者に聞いてみたら、ただネコを持っていった、獣医師も治療したというだけで、細かなコンセンサスがとれていなかった

ということです。そういうところも問題としてありました。

もう一つの問題点は、先ほども言ったように、学級の解体によって動物をどうするかということです。私は、子どもたちに相談しました。たまたま1匹は死んでしまったので、のグループはそういうことを考える必要がなくなりました。でも3匹残っています。そうしたらあるグループは自分が引き取るといった子どもがいました。そのグループでは、その子に飼育のセットごとあげました。もう一つのグループは、2人引き取りたいという子どもが出てきました。最初交代でということだったんですが、1人の子が積極的だったので、その子が引き受けられました。ところが、あるグループは誰もいなかったんです。10人子どもがいて、引き取り手は0だったということです。最初はそのグループには引き取り手が5人くらいいたんです。なぜこのグループだけ5人もいるんだろうと不思議に思いました。そこで、もう一度家で相談するようにそのグループの子どもたちに言いました。具体的には、希望者が自分一人だったと言うようにと言ったわけです。そうしたら、「うそをつくの?」と言ってきたんです。そうか、嘘じやまずいな、ということで、一人だったらどうする?と聞いてこいと言いました。5人もいるということは、親の心の中に、あんなにみんなで真剣に飼っているんだから、ちょっとだけでいいんじゃないかという甘えがあったのではないかと思うんです。私は、今みたいに「僕しかいませんでした」という情報を流して、それでも本気で引き取る気があるか?ともう一度保護者に聞きに行かせたんです。そうしたら、翌日0になりました。そうしたらある子が「これどうするの?学校で飼えば?」とその子どもは言うんです。「学校って誰?」「校長先生飼うの?」と聞くと、「そうだな...」と考え込んで、「先生が飼えば?」と言うので「いいの?」「いいよ」と言って、「それじゃ、君たちにはもう手を出させないよ。先生のところには新しい4年生が来るんだから、君たちにはさわらせないよ」と言ったんです。そして「考えてみて。君たちは2年間飼っていて、上手に抱っこできるけど、新しい4年生は、誰もさわったことがないんだよ。もしかしたらここから落とすかもしれないよ。それを黙ってみているんだね」と脅かしたわけです。そうしたら、「それは許さない」と言うんですね。でも、君たちにはさわらせないんだから、窓の外から自分たちがかわいがったモルモットが虐待される姿をじっと見て

いなさいと揺さぶったんです。そうしたら、彼らはそこから本気になりました。本気になって、それで彼らは何をしたかというと、親を説得したんです。その結果3人出てきました。それででききたのが「モルモットを育てる会」なんです。つまり、3人ずつ順番に1か月ごとに家を回ることにしたんです。

ちょうどこのことが、NHKの総合的な学習の時間のテレビで放映されました。そして、その会のモルモットが4年間飼ったところで死にました。資料の25ページをご覧ください。こういうことがあって、育てる会のモルモットが死んで、育てる会のうちの1人に感想を書いてもらったんです。それが25ページに載っているものです。これを読んで終わりにしたいと思います。

「教室においてグループで飼っていた2年間、シーリンをめぐっては、いろいろなことがあります、よい意味でも悪い意味でもうちの娘は特別な存在になっていたように思います。『シーリンを育てる会』にてもお世話したい気持ち3割、あの残りはおそらく義務感と意地であったと思います。決して崇高な動物愛からお引き受けしたではありません。

ただ4人で飼うということになった時、これで無責任な仲間に腹を立てる必要がなくなったという開放感もあって、シーリンへの愛情がそこで大きく増えたという気がしています。

2か月に1回、シーリンは我が家にやってきては得意のおねだり攻撃で野菜を食べては我が家にほほえみの種をまいていってくれました。そして、次の方にお回しするときには、親の私はまるで自分の子どもを移動教室にでも送り出すような気分にさえなったものです。

4月の下旬、無事に送り出したシーリンでしたが、Sさんが旅行に出かけるということで、急遽、シーリンが戻ってきました。『6月まで寂しいね』といっていた矢先のこの偶然は、今にして思えば神様のお計らいだったのかもしれません。うちに戻ってシーリンはいつものように愛嬌をふりまき、しかし、その2日後、突然逝ってしまいました。我が家に戻ったのは、まるで『死ぬ』ためだったとしか思えないような急逝でした。

一時はダイエットをしなければならないほど

立派な体格だったシーリンでしたが、徐々に体重はへっていき、2か月の移動教室から戻ってくるたびに一回りも二回りも小さくなっていくのは、見ていて痛々しいほどでした。

シーリンを育てる会が発足したとき、たぶん誰しも思ったことは、『我が家では死んでほしくない』ということだったろうと思います。ですが、体重の減りがブラーに達し、シーリンの死がそう遠い未来の話ではないと思い始めたとき、私は自分の気持ちが変わってきてることに気づきました。『シーリンを見取りたい』『死ぬのなら我が家で』そんな思いが沸々とわき出してきました。そんな私の気持ちに応えるように、シーリンは我が家で死を迎ました。

シーリンの死を他の3家庭に知らせ、電話口で親同士涙を流しました。そのとき、私は、ふと、娘の学校文集の分掌を思い出しました。娘は、『シーリンが結んでくれている仲間との絆』という言葉を使っていましたが、この絆は、子ども同士のみならず、親の間にも存在していたことに驚きを隠せませんでした。シーリンは死んでなお、親の心の中にまで、温かいものを授けてくれたのでした。

シーリンの飼育を続けてきた中で、娘がどのように成長したか、どのような教育効果があったのか、そのようなことはわかりません。なぜなら、シーリンは子どもの教育玩具ではなく、4家庭に引き取られた時点でそのような見返りを求めない、ただの『愛おしく思う存在』だったからです。死を体験させた生命の尊さがどうのこうのという、そんな不遜な冷めた目でシーリンの死を見つめることは、私にはできません。

強いて言うならば、娘は、シーリンの死を痛ましく悲しく思うことで、『愛情』というものを推測し得たのではないか。そんなふうに考えております。

娘が文集に書いていた『シーリンからもらった宝物』が、これから娘の人生にどのような影響を及ぼすかはわかりませんが、『愛おしく思える気持ち』をもてる喜びを、シーリンからもらったのだということを、いつかそつと思い出してほしいと思っています。U子の母」

